



## 大原保人

ジャズピアニスト／おおはらやすと

profile ●福岡県出身。3歳よりピアノを始める。「シャープス&フラッツ」をはじめとし、内外の多くのバンドでの経験豊富なキャリアと人脈を活かし、自身の「エイティワンジャズクラブ」を拠点に第一線で活動中。国内およびヨーロッパ各国での演奏会のほか、国際文化交流、後進の育成、特別支援学校の慰問、「ベイサイドジャズ」音楽監督として地域の活性化への貢献等の功績が認められ「千葉県文化功労章」「千葉市市政功労章」を受賞。

ジャズは自分の人生そのもの  
本物の演奏を多くの人に届けたい

ジャズピアニストとして永きに渡り国内外で活躍し続ける大原さんに、演奏との向き合い方や今後の活動について伺いました。

ピアノを始めたきっかけと、ジャズとの出会いについて教えてください。

3歳の頃、教育大学の先生が家に来て近所の子供達にピアノを教えていたので、私はついでに教わっていました。クラシックピアノはそれから18歳まで続けていました。

美術大学に入学して福岡から上京した年に、来日したジョン・コルトレーンの演奏を聴いたのが、ジャズを弾くようになったきっかけです。それまでは、そんな血が滲むような命をかけた音楽というもの知らなかったんですね。そこからジャズにのめり込み、大学も辞めてジャズピアニストとして活動を始めました。

ジャズピアニストとしてこれまでどんな活動をされたのでしょうか？

パリコレクションでウンガロやイヴ・サンローランなどの音楽を担当したのがプロとしてのスタートですね。それから第1回日本レコード大賞を受賞した水原弘さんのバンドに所属し、日本を代表するビッグバンドの「シャープス&フラッツ」に誘われ、足掛け10年ほどいましたね。

1997年に千葉市からの訪問団とともにスイスのモントルー市を訪れ、世界最大級の音楽イベント「モントルー・ジャズ・フェスティバル」に出演し、翌年から開催されている千葉市の「ベイサイドジャズ」に音楽監督として携わっています。ベイサイドジャズには毎年、自分の音楽仲間であり日本を代表するミュージシャンたちに出演してもらい、クオリティの高いジャズフェスティバルを実現しています。

現在は、主にどんな活動を行っていますか？

コンサートも変わらず開催していたし、フランスやスペイン、イタリアなどヨーロッパ各国にも毎年演奏をしに行っていました。今年は「モントルー・ジャズ・フェスティバル」に3度目の出演を果たし、晩年を同市で過ごしたフレディ・マーキュリーが愛用していたピアノを弾くことができました。その足でドイツのパッソウ市を訪れコンサートを開催しました。今年のベイサイドジャズでは、ヨーロッパ公演の成果を披露しますよ。中学校や特別支援学校への慰問や地域のイベントへの出演も続けています。千葉市の子供たちに本物の演奏を聴いて欲しいと思っているので、学校での演奏は子ども向けにしたものではなく、もうがっちり演奏します。その方が子どもたちも感動するみたいですね。

大原さんが思うジャズの魅力とは何ですか？

どういうふうに表示したら、どういうふうな情景が浮かぶかということをもまず考えてサウンドを作っていくのですが、同じ曲を演奏しても毎回違うのがジャズなんです。聴いてくれる聴衆によっても、一緒にやってくれるメンバーによっても、音が変わる。いろんな要素が僕に刺激を与えてくれるわけですが、その刺激に対するお客さんの反応みたいなもの、ジャズのゆったり取っ取りが、面白さというか楽しさではないでしょうか。

ジャズピアニストを続けてきてよかったなと感じるときと、音楽家として目指すものを教えてください。

続けてきてよかったというのは、いつも思っていますよね。どんな会場でも、来てくれたときのお客様が満足げな顔をしてくれたり、みんなの顔がいい顔になってくれればやりがいもあるといいますかね。

目指すものは、聴いた人がすぐに僕の演奏だとわかる、そういう自分なりのサウンドを作っていくことしかないと思うんです。人の真似をせず自分自身であり続けることで、オリジナリティを追求しないとつまらないですよ。そして、どこでも呼んでくれたらそこで演奏するので、いろんな人に演奏を聴く機会を持ってもらいたいです。生でいい音楽を聴くことで人生が豊かになりますからね。

読者のみなさんにメッセージをお願いします。

本物のジャズは、心に突き刺さるような芸術的なものだから、しっかり観て聴いてほしいです。いろんな人の良い音楽をたくさん聴いて、音楽だけではなく美術館にも行っていい作品をたくさん観て、見る目と耳をどんどん養っていただきたいですね。そうするとつまらないものがわかるようになりますから。